

体育嫌い22年

佐藤恵美

芸術専門学群卒業生

ある春のこと

突然だが昨年の春はすこぶる調子が良かった。朝は早く起きられるし朝ご飯もしっかり食べて、シャキッとした気分で朝を迎える一日を送ることができた。この世で正常に生活しておられる方から見れば、何をいとるんだと喝を入れられそうだが、この大学生活4年間の中で骨の髓まで染着いてしまった因太い怠け癖の私の心身には、とても新鮮で清々しいものだった。ちょうどその頃、就職活動中で寝ぼけた頭と顔をすっきりさせるため、早朝ランニングをしていたのだ。ループをたった1周、それだけでもこの私には絶大な効果があった。ランニングを始める前は、ろくに朝食も食べずにに行くため、電車の中で貧血になりかけることもあった。ちゃんと朝食をとったとしても移動中に寝てしまい、会社に着く頃にはすっかり心の余裕がなくなっていた。それが朝、体を少し動かすことであ

動中の電車の中では面接に対する心構えができるようになった。身体が目覚めただけでなく何より、心に余裕が、自信が持てた気がした。

そんな好循環もあって調子に乗った私は実技ではないが体育に関する授業を2つ取ることにした。1つは授業の中で、アスリートの方や、スポーツを通じて多方面の分野で活躍されている方々の話を聞けるというものだ。もうひとつはアスレティック・リハビリテーションを基本的な人体の仕組みの講義から、テーピングの実技指導までを受けられるものだ。

両授業とも四年生にもなって、卒業単位不足の危機を迎えたため履修したという、若干、不純な動機も含まれてはいたことは否定できない。しかし、専門の授業より遙かに多い出席率であったこと（専攻の先生方には大変失礼なことをしました。）からも自分が進んで授業に参加していたことがわかる。

体育嫌い？

実際、自分でも驚いていた。体育という分野に自ら興味を示すなんて。正直言って私は小さいころから体育の授業が苦手だ。いや、むしろ嫌いなほうだ。ましてや今、自分が体育に関する事を偉そうに書き連ねるにはかなりの抵抗がある。だから、体育嫌いの人間の見地から大学における体育の存在を書いてみるつもりだ。先ほど苦手と言ったがどれくらい苦手かというと、運動会、マラソン大会、水泳大会、球技大会、体力測定などというフレーズを聞くだけで緒み上がってしまう。“天国と地獄”やピストルの音なんて本当にもう最悪だ。かといって、やる気がないわけではなく、むしろ真面目にやろうとして緊張し、ギクシャクした動きになるのだ。実技のテストの前日など憂鬱で仕方なかったものだ。その点は今もあまり成長しておらず変わらない。

と、散々、体育にケチはつけてきたものの、別に運動が嫌いなわけではないし、能力がないわけでもない。暇があればテニスをしたり、走りもする。多少遠くても歩ける距離なら自転車よりも足を使う。だがやはり、大学に来てまで体育の授業があると聞いたときは心底がっかりした。週に1回、自分の興味のある競

技を通年で行うというのがせめてもの救いだった。ところが蓋をあけてみるとなんと1年次は空手を2年次は柔道をやるはめになっていた。希望した種目は人数過多のためジャンケンで決められたのだ。あまりにも今までの自分の人生とかけ離れた競技だったため、当初は自分の勝負運の弱さを呪ったものだ。

ちょっとした不満

仕方なく始まった授業の中で、まだ見ぬ自分の才能の期待と、授業が進むにつれ膨れていく不満があった。

<不満点>

1. 通年授業なのに単位が少ない。
 2. 広い敷地内での移動の難しさ。
 3. 授業数の少なさから集中力に欠ける。
- 2に関しては、先生も時間を多少遅らせて開始する配慮をしてくださるが、終わる時間も次の授業に差し支えなくするために早くなってしまう。これでは折角の週1回の時間がもったいない。また、基礎中の基礎を1年間という長い時間をかけて教えるのには無理がある。1年間毎日のようにやればそれなりの実力もつくれだろう。前の週の復習だけでも精一杯だ。ある一つの曜日だけでも体育の授業だけにあてる日をつくってもいいのではないだろうか。

<期待点>

1. 可能性が広がる。
2. 他分野の人との接触。
3. 気分転換。ストレス解消。
4. 著名な先生陣。

1でいう可能性とは、自分が得意とする種目を専攻できなかった場合に偶然めぐり合う、新たな世界（私でいうと空手と柔道なのだが）で開拓される可能性の事をいう。未開拓のものは自分にはできないという概念も苦手という意識もないで案外素直に受け入れられる。そこで何かを見つけてしまえば儲けものだ。自分の可能性が広がったことになる。週に1度とはいって、授業の空きの少ないこの大学の教育システムではいい息抜きになっているのかもしれない。サークルや専攻以外での友人もできることがある。

こうしてみると大学にとっての体育の存在意味とはただのリフレッシュタイムになってしまう。確かにこんなと素人にオリンピック選手なみのシゴキをされても困るのだがもう少しカリキュラムの改善を図ってほしい。1年間そのスポーツを学ぶのだから、一日体験コースのお客さんのような扱いでは、正直ラクではあるが何か物足りないので。

体育っていいかも

体育が嫌い嫌いといつときながらもそのプレッシャーを求め、達成感を探している。体育の良さはそこにあるのだ。競争に勝つ、プレッシャーを克服する、そして何より出来なかったことが出来るようになる達成感を得ること。これが私の苦手とする体育と、運動の違いなのだ。22年間体育というプレッシャーに負け続けてはきたけど、小さな出来ることからの積み重ねをやってきた達成感は確かにある。

その精神を考えると芸術にも通じるものがある。というのも、絵画の中の日本画というものを私は専攻し4年間やってきたのだ。簡単にいうと岩や泥を碎いたものを絵の具とし、和紙に描いていく絵画だ。好きなことをやっているはずだが4年間、1枚の画面に向かって何ヶ月も挑むことを続けていたらさすがに嫌気がさすときだってある。その中で自分をみつめながらコツコツと積み重ねていく姿勢、それを成し遂げたときの爽快感と満足感は体育で得られるそれと似たものを感じる。この二つはただの断片であり、他の事物にだって充分当てはまることだろう。ただ様々な体育の授業を通じて偶然見つけた私のライフワークとの共通点を大事にしたいと思う。

(さとうえみ 美術専攻日本画コース)